The 4th Weekday Afternoon Concert

平日の午後のコンサート。

第4回

3/15

音楽交友録 イタリア&ロシア

指揮とお話◎**アンドレア・バッティストーニ**
Andrea Battistoni, *conduct & talk*

コンサートマスター◎**三浦章宏**
Akihiro Miura, *concertmaster*

ヴェルディ:歌劇『運命の力』序曲 (約8分)
Giuseppe Verdi: “La forza del destino” overture (ca. 8 min)

— 休憩 Intermission (約15分) —

チャイコフスキー:交響曲第6番 ロ短調 作品74『悲愴』(約46分)
Piotr Ilyich Tchaikovsky: Symphony No. 6 in H minor “Pathétique” op.74 (ca. 46 min)

Ⅰ アダージョーアレグロ・ノン・トロッポ Adagio-Allegro non troppo
Ⅱ アレグロ・コン・グラツィア Allegro con grazia
Ⅲ アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ Allegro molto vivace
Ⅳ フィナーレ.アダージョ・ラメントーソ Finale. Adagio lamentoso

3/15(水) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Wed. March 15, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

文化庁
Agency for Cultural Affairs

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団 / 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra / Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト:ハラダ チエ

本公演のポイント

解説◎柴田 克彦

1 ◎ロシアで初演されたヴェルディの作品と、
イタリアを愛したチャイコフスキーの人気交響曲

2 ◎『運命の力』序曲は、
ヴェルディのオーケストラ音楽を代表する名作

3 ◎『悲愴』交響曲は、
急逝直前にチャイコフスキーが残した謎多き作品

4 ◎『悲愴』交響曲は、最終楽章が遅いテンポで
静かに消える、当時まれな交響曲

5 ◎共通するのは、劇的な展開と甘美なメロディ

プラス・ワン！

チャイコフスキーのイタリア嗜好

イタリアを愛したチャイコフスキーは、当地をたびたび訪れ、明るく華麗な「イタリア奇想曲」や、弦楽六重奏曲『フィレンツェの思い出』（音楽自体はフィレンツェと関係ないのですが……）などの作品を書いていますし、本日演奏される『悲愴』交響曲の第3楽章にも、「タランテラ」という南イタリアの民族舞曲を用いています。そうした嗜好の源は、4歳の頃に父から与えられた「オルケストリオン」にあった模様。これは、音楽が流れてくる手回しオルガンの一種で、彼は、そこに入っていたモーツァルトの曲や、ロッシーニ、ドニゼッティ、ベッリーニといったイタリア・オペラのメロディを夢中になって聴いたといいます。ちなみにイタリア語で書かれたモーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』のロシア語訳まで手がけていますから、その嗜好もかなり本格的（同訳は今も用いられているとか）。ただ、チャイコフスキーの母方の祖父はフランス人。つまり彼はフランスの血が4分の1入ったクォーターでした。となれば、体内に流れるラテンの血が騒いだのかも……。

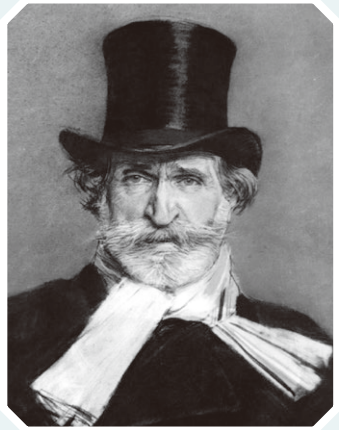
本日の作曲家

ジュゼッペ・ヴェルディ

Giuseppe Verdi
（1813–1901）

イタリア・オペラ史上最大ともいうべきロマン派の作曲家。パルマ地方の村ル・ロンコレの宿屋兼食料品屋に生まれた彼は、周囲の盛り立てで音楽を志しますが、ミラノ音楽院の入学試験で落とされ、さらには3年の間に2人の子と妻を亡くしてしまいます。しかし1842年に初演された3作目のオペラ『ナブッコ』で大成功。初期の愛国的な作品の数々で、イタリア独立運動の象徴的存在となり、特に『ナブッコ』の合唱曲「行け、わが思いよ、金色の翼に乗って」は、第2のイタリア国歌と呼ばれるほどの支持を集めました。さらに中期の『リゴレット』『トロヴァトーレ』『椿姫』で多大な名声を獲得。晩年にも『オテロ』『ファルスタッフ』等の傑作オペラを世に送り出しました。また、財を成してからは農園も営み、ミラノに音楽家のための老人ホーム「安らぎの家」を創設。一時期は国会議員を務め、2人目の妻ジュゼッピーナの支えもあって長寿を全うしました。

ヴェルディは、歌劇場のレギュラー演目が最も多い作曲家であり、全26作のオペラの中には、前記のほか、『マクベス』『仮面舞踏会』『運命の力』『ドン・カルロ』『アイーダ』など名作が目白押し。複数の序曲や「レクイエム」もコンサートを賑わしています。その音楽は、無類の旋律美と力強さを誇り、心理描写や劇的表現も巧み。後期には「音楽とドラマの融合」を成し遂げ、その意味でもドイツのワーグナーと双璧を成す存在となりました。



ヴェルディ（1813–1901）
by Giovanni Boldini

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyotr Ilyich Tchaikovsky
(1840−1893)

チャイコフスキー(1840−1893)

19世紀ロシア最大の作曲家。鉱山技師を父に、ウラル地方のヴォトキンスクで生まれた彼は、早くから楽才を示しますが、ペテルブルクで法律を学び、一旦は法務省に勤務しました。しかし音楽学校で学び直し、卒業後はモスクワ音楽院の教授に就任。1870年初演の幻想序曲『ロメオとジュリエット』を皮切りに、続々と名作を生み出しました。一方で、1877年にミリューコヴァなる女性と結婚するも、2か月後に神経を病んで入水自殺を図り、すぐに別居。直後に鉄道王の未亡人フォン・メック夫人から多額の援助が約束されたのを機に音楽院を辞めて作曲に専念し、二人は14年もの間会うことのない奇妙な関係を続けました。1887年頃からは指揮活動も行い、内外で多大な名声を博しましたが、『悲愴』交響曲初演の9日後に急死。一応コレラが原因とされてはいるものの、同性愛にまつわる醜聞と絡めた自殺説など、その唐突な死は謎に包まれています。

彼は情緒不安定で神経質であると同時に感受性が強く、作曲時の集中力は物凄かったとか。作品には、交響曲第4、5、6番やピアノ、ヴァイオリン両協奏曲はじめ有名曲が多数。中でも『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』の三大バレエは、バレエ音楽への認識を一新させました。彼の作品は、短調の曲が多く、センチメンタルで情熱的。ロシア情趣と西欧様式の巧みな融合と相まって、国際的な支持を獲得し、日本での人気も抜群です。

楽曲解説

⇒「交響曲第6番『悲愴』の解説は12ページをご覧ください。

ヴェルディ: 歌劇『運命の力』序曲

『運命の力』(全4幕)は、『椿姫』をはじめとする名作の数々でヨーロッパ中に名を轟かせていたヴェルディが、ロシアのペテルブルクの帝室歌劇場(現・マリインスキー劇場)の依頼で作曲した、中期の名作です。1861年6月に作曲の契約を結んだヴェルディは、同年秋に完成。12月に初演のためペテルブルクへ行きますが、主役ソプラノ歌手の病気で1年延期になります。そのため翌1862年9月再びペテルブルクに入り、2か月ものリハーサルを行った後、11月の初演で大成功を収めました。さらに4回目の公演では隣席したロシア皇帝から賛辞を受け、その後勲章も授かりました。しかし終幕など気に入らない箇所があったヴェルディは、7年後に改訂。こちらは1869年2月にミラノ・スカラ座で初演され、以後、通常は改訂版で上演されています。なお、18世紀スペインを舞台にした物語は、誤って恋人レオノーラの父を殺してしまったドン・アルヴァーロが運命の力に翻弄され、レオノーラは兄に殺されるという陰惨な悲劇です。

今回演奏される序曲は、ヴェルディの管弦楽作品の中では最大の演奏機会を誇る人気作です。ただしこれは、1869年スカラ座でのイタリア初演にあたって、ペテルブルク初演時の前奏曲を大幅に書き直したもの。初演時の前奏曲は、改定後の序曲と同じ素材が用いられていますが、3分ほどの導入的な音楽で、単独演奏には向いていません。それに比べて現状の序曲は、シンフォニックで輝かしく、変化に富んでいます。

曲は、本編の旋律を用いて展開される、オペラ全体を暗示した音楽。金管楽器の響きや木管楽器のソロも注目点となります。金管楽器の強奏で始まり、まずはアレグロ・アジタート・エ・プレストで、本編を象徴する「運命のテーマ」が奏されます。次いでテンポを落として「第4幕の二重唱」、さらに遅い「祈りの動機」等が登場。その後はアレグロ・ブリランテとなって劇的な盛り上がりをみせます。

しばた・かつひこ (音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。